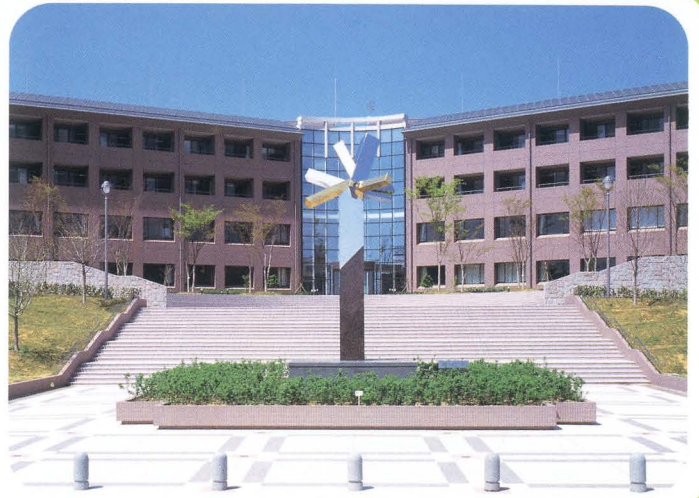
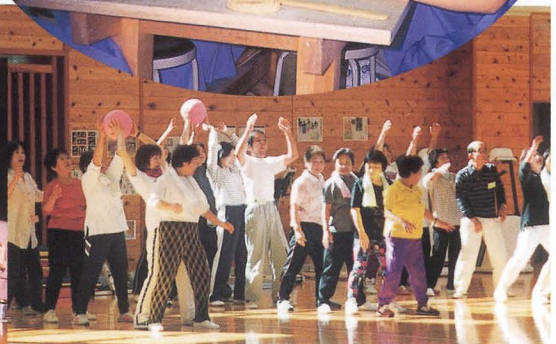


IPNU

キャンパスネット



2002.3 MAR. Vol.2



目次

大学の主な動き	2~3	講座・領域紹介	4
第2回入学式	2	基礎領域	4
フィールド実習	2	母性・小児看護学講座	4
オープンキャンパス	2	キャンパスライフ	5
3年次編入学試験の実施	2	大学生活この一年	5
国際交流サテライトを開設	3	看護学実習をとおして	5
大学祭	3	図書館から	6
日本老年看護学会第6回学術集会	3	地域ケア総合センターから	6
SDミーティング	3		



石川県立看護大学
ISHIKAWA PREFECTURAL NURSING UNIVERSITY

看護学部 看護学科

〒929-1212 石川県河北郡高松町字中沼ツ7番1
TEL 076-281-8300 FAX 076-281-8319
URL <http://www.ishikawa-nu.ac.jp>
E-mail office@ishikawa-nu.ac.jp

大学の主な動き



第2回入学式

4月9日(月)、本学講堂において第2回入学式が行われ、84名(男子5名、女子79名)が新たに入学しました。新入生を代表し、川合美恵さんが「学業に励むことを誓います。」と宣誓、金川学長は訓辞の中で「常に革新の気持ちで自ら考え、専門性と独創性を高めること望みます」とはげましの言葉を贈りました。

フィールド実習

フィールド実習は1年生全員と全教員が関わる、入学後最初の臨地実習です。目的は「社会に生活し、職業人として働いている人たちの日常に触れ、様々な生き方や考えについて身をもって学び、人間を生活者として全人的に理解すること」です。したがって、看護学実習の施設とは異なる一般の人が働いている場所が対象です。7月2日(火)から4日(木)の間の2日間を実習日としているので、それまでに学生自身がテーマを決め、フィールドを選択します。3~4人のグループを1人の教員が担当して、事前の学習やフィールド(施設や場所)との連絡調整について指導するが、主体はあくまでも学生自身です。学生たちは参考図書やインターネットで検索し、それぞれの関係者に目的を説明して実習受け入れを要請しますが、場合によっては相手の事情で実習期間が夏休み中になることもあります。

今年度は36カ所が対象となりました。学生たちは旅館、結婚式場、郵便局、警察署、水族館、動物園、浜茶屋、牧場、製菓業、酒造業、農場、牧場、陶芸館、給食調理場、花火工場、災害救助犬団体などへ出かけ、それぞれの場所で実りある体験をし、学びました。共通しているのは職業への誇り、チームワークの大切さ、相手への思いやりなどで、看護の基礎として受け止められています。

学生たちは9月に全体報告会で成果を発表し、報告書の提出とともに自己評価を求められます。この実習を通して、学生自身は視野が広がり、人間として成長したと考察しており、専門の看護学実習が始まる前に行われるフィールド実習は若い脳に良い刺激を与えているようです。



オープンキャンパス

高校生らが本学に体験入学するオープンキャンパスは7月15日(日)に行われ、約100名の参加者が、施設見学や公開授業を体験した。大学概要・入試情報の説明後、参加者は5班に分かれて学内を見学し、午後からの公開授業は参加者の選択制で、「天使とキューピットー看護と助産の心ー」と題する講義など6授業に、また、後半は「自分の身体(体力)を知ってみよう」など6つ実習授業を体験、参加者それぞれが1日看大生気分を味わいました。

3年次編入学試験の実施

本学の3年次編入学試験が9月9日(日)行われた。

募集人員10名に対して県内外から27名が受験し、専門科目と外国語(英語)、面接試験に臨んだ。合格発表は9月19日(水)に行われ、10名が合格した。

国際交流スタート——交流サテライトを開設

【交流サテライトから世界をつなごう!!】

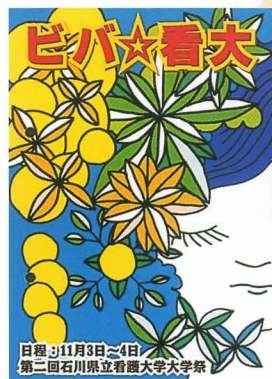
平成13年9月国際交流拠点として交流サテライトが、地域ケア総合センター内に開設されました。本学の教育目標である「国際的な視野から、健康問題や看護問題を思考、判断し、国際社会でも活躍できる人材を育成する」を実践・体験できる場として、様々な活動を展開しています。まず、世界共通語である《英語に触れる》ことから、イングリッシュ・ブレイクと称して、外国人講師をお招きし外から見た日本やここ高松の印象を、また交流の集いと称して、海外の紹介（英国・中国・ブラジル・米国・オーストラリア）や世界情勢、看護情報を身近に体感する、さらに初の試みとして11月にはハロウィーン・パーティーを企画運営しました。一方では、千葉大学から西田弘次先生をお招きして「異文化をこえた国際理解とは」について、講演会も開催することができました。



交流サテライトの目的は、学生皆さん一人ひとりが世界への第一歩を踏み出す土台になることです。英語が苦手!!…まだまだ留学なんて!!…国際交流なんて!!の声も聞かれますが、一度来場・参加してみてください。勉強や試験に追われる毎日かも知れませんが、このサテライトは異文化空間かも知れませんが、夢工房になるかも知れません。

様々な活動の他に、書籍や関連資料（留学体験記・看護留学）、雑誌（TIME・Newsweek・ひらがなタイムス）や新聞（毎日ウィークリー・看護ニュース）も誰もが気軽に見られるように置いています。英語やロシア語、中国語のCDやテープを聴くことも可能です。14年度はより設備を整え、様々な試みに挑戦し、皆様をお待ちしています。（国際交流委員会）

大学祭



11月3日～4日、第2回看護大祭が開催され、健康講座・ライブ・模擬店等、多彩な企画が催された。また、国立療養所多摩全生園自治会長の平沢保治が「人として人間として生きる」と題して、自らの体験とともにハンセン病への理解を呼びかけた講演会が開催され、参加者は感銘深く聞き入っていた。



日本老年看護学会第6回学術集会

日本老年看護学会第6回学術集会（会長：金川本学学長）が11月10日（土）、11日（日）の両日、本学で開催され、全国から高齢者看護の研究者440名が参加した。

全国規模の学会が本学で開催されるのは、初めてであり、「高齢者のしあわせと看護の役割」をテーマとした会長講演、「老年看護学の課題—高齢者ケアの最前線から」、 「介護保険下における高齢者ケアに果たす看護の役割を探る」と題したシンポジウムが行われ、熱心な討論や意見交換が行われた。また、計96の一般演題があり、口演50題、示説46題が行われた。

SDミーティング

大学教員の教授能力を開発・推進するFD（Faculty Development）活動が各大学で行われています。当大学においても教育、研究、看護に関して各教員が持つ情報や意見の交換を行う場を設け、相互に理解し、協力、成長しあいながらFDに取り組むことが必要だと考え、SD（Staff Development）ミーティングが発会しました。「FDは個々の教員の能力や考えのみでは成果が上がらないので、学内のStaff全員でDevelopmentを目指してやってみよう」という意味を込めて、SDと命名。

講座・領域紹介

基礎領域 ● 紹介

基礎領域には5つの「学科目群」があり、現在6人の教員がいます。健康体力科学担当の花岡美智子教授（人間形成系学群）、心理学担当の木場清子教授（人文形成系学群）の2名の印象派女性教官と哲学担当の浅見洋教授（人文形成系学群）、人間工学担当の小林宏光助教授（自然科学系学群）、英語担当で国際・情報科学系学群の多田博生教授、情報統計学担当の松原勇教授のルネッサンス派男性教官4名が所属しており、それぞれが優れた研究業績と教育経験を持った個性派集団です。



後列左から松原勇教授、小林宏光教授、多田博生教授、浅見洋教授
前列左から木場清子教授、花岡美智子教授

看護教育の現場では珍しく男性が多く、かつ働き盛りで委員会等の大学運営でも中核的な役割を果たしています。

研究や社会活動と同時に、本学の建学精神の一つである「豊かな人間性と高い資質を兼ね備えた看護職の育成」という目標に向かって一丸となり努力しています。一人一人専門分野は異なっていますが、それぞれが力を十分に発揮し、協力し合いながら全人的な人間教育を目指しています。これからも互いに切磋琢磨しながら、本学の発展のため、良き看護職育成のため個性派集団として頑張ります。

母性・小児看護学講座 ● 紹介

母性・小児看護学講座は、母性看護学と小児看護学の分野に関する教育と研究、および地域への貢献をめざした活動を行っています。教員は母性看護学に4名、小児看護学に4名の計8名です。

教育では、講義や演習、病院や保育施設・小学校での実習を通して、母性看護学と小児看護学が対象とするライフステージの人々の生活に関する基礎的知識（母性の概念、性の発達と妊娠・出産・産褥、小児の発達と反応、養育環境）や、妊娠・出産・産褥の時期の女性や健康問題をもつ子どもとその家族の反応（心理と行動）、母子や家族をとりまく社会的環境、看護の機能・方法・技術などの学習を行います。

研究については、次のテーマに取組み、看護の知識の蓄積と、実践活動へのフィードバックをめざしています。①リプロダクティブ・ヘルスに関する研究、②流産を経験した女性への援助に関する研究、③子どもを虐待する母親の心理と援助に

関する研究、④痛みを伴う処置を受ける子どもへのケアに関する研究、⑤子どもを亡くした家族への援助に関する研究です。

地域ケア総合センターにおいては「母子看護相談室」を年に8回開き、臨床や教育現場の看護職と情報交換や共同研究などを行っています。また、子どもの虐待防止に関する研修会などに講師として出向いています。さらに、日本看護協会の「まちの保健室づくり」活動に参加し、老人保健施設なでしこの丘と共に地域の子育て支援に取り組んだり、市民団体（子どもの虐待防止ネットワーク石川）の活動にも参加しています。



左から田屋明子助手、山岸映子助教授、西村真実子教授、井上ひとみ講師、
杵淵恵美子講師、大野佐津樹助手

キャンパスライフ

大学生活この一年

看護学科1年 竹内 清華

看護大学の一員となって早一年が経つ。この一年は凄まじい勢いで過ぎ、とても内容の充実した一年であった。

大学生活は、全国から同じ夢を抱いた人達が集まり、一学年80人余りという少人数の特性を生かして、皆が仲良く個性を絡め合いながら、創立3年目に入るまだ歴史の浅いこの大学を創造している。

また、看護の専門分野を学習していくにつれ、一つの学びから様々な方向にその学びを広げ、考察していくことの重要性を実感できるようになった。7月のフィールド実習、12月の基礎看護学実習を経験し、社会の中での看護のあり方や自分が目標とする看護職が少しずつ考えられ、具体化されてきたように思う。一方で、看護に関するだけでなく、新しい知識を身につけることで、家族や地域、自分への視野も広げられたのではないと思う。自分の将来のために自らが選択した道を全うしている自分自身が、とても意味のある存在だと感じられるようになってきた。

この一年を通して徐々に自分の目指すものが明確になってきた。それが夢で終わらぬよう、一步一步確実に進み、仲間と共に、幅広い視点で多くを学び自分の糧となるよう努めていきたい。

看護学科1年 本井 久美

今思えばあっという間の一年だった。今では慣れてきたこの大学も、入学してきた当時はすごく緊張していたものだ。「大学」というものにあこがれを感じていたし、「大学生」ということで自分が少し大人になった感じがしていた。しかし、自分はちっとも大人になっていなかった。そう感じた一年間だったと思う。はじめてのレポート、はじめての実習……いろいろな「はじめて」にとまどいを感じたときがあった。はじめてだから戸惑うのも当たり前かもしれないが、そのときの自分はなぜか重く考えてしまった部分があった。いろいろな戸惑いの中で時には自分の醜さを感じたときもあった。「なぜ自分はこうなんだろう」と自分について考え込んでしまった時期もあった。だが、それは今まで自分の中で考えられていなかった部分であり、自分について振り返る時期であった。だから、この一年で自分は大学で新しいことを学んだと思う。またいろいろと考え込むことがあると思うが、それが自分の糧だと考え、ゼロからスタートするような気持ちで、また一年頑張っていきたいと思う。

看護学実習をとおして

看護学科2年 清原 幸恵

私は、大変緊張しやすい体質で、今まで何かあるとすぐに周囲の人に頼ってしまいがちでした。(今でもそういうところがあります…) 初めての实習前も、緊張してしまい、ドキドキがとまりませんでした。そして、いつものように友達に頼りっぱなしになっていました。しかし、実習中、患者さんのベッドサイドでは誰にも頼ることはできません。自分の今まで積み上げてきた看護技術能力と疾病に対する知識が試され、それが直接患者さんの病状に影響するということを思い知らされました。

看護するということは、人を思いやる気持ちも大切ですが、技術の向上、知識の習得など、患者さんの命に直接関わってこることも怠ってはいけないことを、実習をとおして改めて知り、今までいやいや受けていた授業もあったけど、どの授業も「患者さんにつながっている」という気持ちで真剣に受けなければならぬと思いました。

これから3年生になり、ますます実習の機会が増えますが、常に患者さんの立場にたって、自分のやりたい看護を患者さんに押しつけないように、また、一つ一つの実習を通して、看護的にも、人間的にも成長していきたいと思っています。

看護学科2年 山崎 裕子

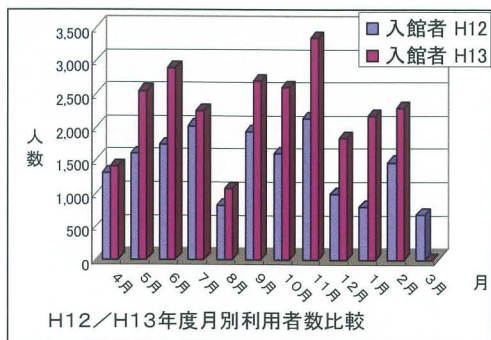
入学して2年間の間にいろいろな実習をしてきました。その中で精神看護学実習が印象的でした。私は精神看護学実習Ⅰではじめて直接に精神障害者の方と接したのです。この実習をするにあたって、私は以前から精神障害者への偏見があるのを自覚していたので、うまく接することができるか心配でした。今までの実習でも患者さとのコミュニケーションがうまくいっていませんでしたので、まして精神障害者の方とはどう接していけばいいのか本当にわかりませんでした。この実習で自分では精神障害者に対する偏見ができるだけなくなればよいと思っていましたが、思った以上になくなっていないのがショックでした。しかし精神障害、精神障害者に関する知識は深まったので、これからの実習に役立てたいと思います。また、すべての対象者において、ゆっくりと時間をかけて相手の全体像を把握することが必要です。そしてその上で信頼関係を築き、十分相手を理解していくことが大切であると改めて実感しました。

図書館から

昨年度の開学と同時に附属図書館としてオープンしました。2年目に入っの図書館活動の足跡を数字で見たいと思います。まず、初年度は1.5万冊の蔵書でしたが、現在では2.9万冊にまで増加しています。また学年も1学年84人が増えたため、図書館の利用者数も1.5倍になっています。(まだ、2月の利用数までしか出ていませんので、確定ではありません)また、昨年度10月1日より一般利用者への館外貸出が可能になりました。現在205人の方々が特別利用証の交付を受けています。これと同時に他館(他大学、公共図書館)への相互貸出のサービスも始めました。さらに他大学、他機関からの文献複写の受付も始まり日常業務も忙しくなっています。

つぎに来年度の目玉として、看護大学附属図書館の所蔵図書の核となるナイチンゲールコレクションを購入することになりました。「近代看護はナイチンゲールから始まる」と言われている割にはその業績はあまり知られていません。

コレクションには、クリミア戦争で病人やケガ人たちに希望を与え、「ランプの天使」と呼ばれたフローレンス・ナイチンゲールの2通の自筆書簡をはじめ、「看護覚書」の初版本、自筆署名入献呈本、ナイチンゲール著作・論文が11点、ナイチンゲールに関する著作13点、さらに彼女を取り巻く協力者や友人達の手紙、そのころのイギリス国内の熱狂を感じさせる楽譜など、いずれも現代では入手の難しい稀少文献・資料が全28点が収集されています。来年度の入学式(4月8日)から館内展示を行います。是非一度足を運び、ご自分の目でお確かめ下さい。



地域ケア総合センターから

地域ケア総合センターは地域に開かれた大学にするための窓口として、一般県民の方々を対象とした講座や、専門職を対象とした研修会等を開催しています。

また、本学教員による看護・福祉分野の課題についての調査研究も行っています。

■いきいき健康講座

生活習慣病の予防策のひとつとして楽しいウォーキングやストレッチ体操、身近にある道具を使って行う手軽な運動を紹介しながら、参加者に習慣的な運動の必要性を理解してもらう講座です。春・秋の2回(5週間、毎土曜日)開催し、好評を得ています。14年度も引き続き開講する予定です。



■健康&リフレッシュ講座



加齢による心身の変化や健康を保つために必要な栄養・運動について学んでもらおうと、3回シリーズで開催されました。特に栄養について考える講座では、参加者の自家製味噌汁の塩分測定や、清涼飲料水の糖度測定などを行いました。

■看護・介護講演会

「家族を看護すること」をテーマに、家族看護研究所長渡辺裕子氏を招いての講演会が開催され、看護専門職など300名の参加がありました。

■看護婦等養成施設教員研修

県内の看護職等の養成施設の教員、大学の臨床実習の受入施設の職員の方々を対象に、三重県立看護大学川野雅資教授の「看護教育におけるIBLの導入」と題する講演・演習が行われました。

また、県内保健福祉センター、市町村保健婦等を対象とした疫学セミナーや小児病棟等に勤務する看護職を対象に業務上の課題や研究活動について研修を行う母子看護相談室なども行われました。

発行 ● 石川県立看護大学広報委員会

〒929-1212 石川県河北郡高松町字中沼ツ7番1
TEL 076-281-8300 FAX 076-281-8319